

地域金融機関の課題と役割

経営トップ講義
@県立大
「ビジネス経済の実践」要旨

⑦



「金融機関は国の金融政策、国際情勢に左右されるが、逆手に取って攻めの経営をするかが大事だ」と語る吉澤頭取
＝県立大佐世保校（山口隆行撮影）

親和銀行頭取
吉澤 俊介氏

私は松浦市にある鷹島の出身だ。高校は佐世保で、東京の大学に通った。映画制作の仕事をしたかったが、高校のときに父親を亡くし、母親に育ててもらった。「できれば九州に帰ってほしい」と言われ1978年に親和銀行に入った。初任地は福岡支店で、現金を預かる出納を半年担当した。毎日集まる紙幣をきれいなお札と使えないお札に分けた。新入行員7人のうちなぜ私なのかと思ったが、誰かがやらなければならぬ。まず

は与えられた仕事を頑張ろうと思った。

平戸支店や長崎営業部、東京事務所を経て93年から佐世保本店で勤務した。九州銀行（2001年）やふくおかフイナンシャルグループ（FFG、07年）との経営統合に携わった。14年に頭取になった。経営統合に2回も中心的に携わった銀行員はいないだろう

う。現在は十八銀行との経営統合に基本合意し進めている。そういう星の下に生まれたのかなと思う。何としても成し遂げたい。銀行員は仕事を通し自分も成長でき地域の発展に貢献できる。

銀行を取り巻く三つの課題がある。まず人口減少問題だ。長崎県の人口は15年に1337万7千人だったが、毎年1万

2千人ずつ減っている。特に若者が就職の際に流出している。地元にも優秀な企業がある。私たちは一社一社を支援して強くして、いいところを知ってもらい、地元のために頑張る人を増やしたい。

低金利も課題だ。この10年、国内の金利は下がり続けている。親和銀行は2兆2千億円の預金があり、1兆5千億円貸し出しがある。残りの7千億円が国債を買っても金利は低く、十分に収益を上げることができない。

三つ目は異業種の台頭だ。イオンやアマゾン、楽天など流通系やネット系の参入が相次いでいる。資金管理や決済、資産運用などをスマートフォンやAIで提供する「フィンテック」もある。フィンテック企業は欧米中心に2千社あり、さらに増える。脅威だが、

FFGは先に取り込み、新たな金融サービスを提供している。親和銀行は10月からスマホを使った取引サービス「ウォレットプラス」を始めた。金融機関は国の金融政策、国際情勢に大きく左右される。課題をどう乗り越えるか、それを逆手に取って、いかに攻めの経営をするかが大事だ。

若さは特権だ。失敗を恐れずに進んでほしい。私は大学の教授から「君たちはコンペイトーのようなものだ」と言われた。若者にはトゲがある。あちこちにぶつかり、だんだん円くなる。仕事はマニュアルのないものもある。教えてもらえばかりではなく「なぜ」を3回繰り返して自分で答えを見つけたい。初めからやりたい仕事をできるわけではない。私も紙幣を数える仕事から始まった。個性を生かして自分自身を高め成長してほしい。（西村伸明）

次回12月5日に掲載します

地元のため頑張る人を